故住谷悦治先生 追悼のことば

松山義則

住谷悦治先生は、一九二二年同志社大学にご着任になりました。ときに、二十六歳の少壮学者であられました。同志社の創設者、新島襄先生と同郷の群馬県に生を享けられ、その生涯を通して新島先生を敬慕する方でありました。牧師、住谷天来先生から利根川で洗礼を受け、東京大学新人会において、吉野作造先生のもとに学ばれた敬虔なキリスト者であり、また社会主義者として真摯に生きぬいた方でありました。

先生が第十四代同志社総長に就任されましたのは一九六三年、爾来十二年三期に及ぶ間でありましたが、六十年安保のあと全国的にたかまりをみせた、学園紛争の時機であり、学生とのきびしい団交、またその余波を受けた各種会議も決して平穏ではありませんでした。罵詈雑言、批判、糾弾をあびるなかに、自説に立ち、しかも穏かに心広く、じっと耐えられた先生のお姿がいまも目前に浮びます。学校法人同志社理事会における田辺新校地の購入、つづいて同志社商業高等学校廃校の

決定など、苦渋にみちた意志決定がありました。

折り折りに壇上から語りかけられるお言葉のかずかずは聞く人びとの心を打ち、深く心に残る洞察と示唆にとむものであり、情感に溢れるものでありました。先生はまた、心から自然を愛し人々をいつくしみ、そして芸術を楽しみとする方でありました。自ら絵筆をもって、写生をたのしまれ、カメラを手にひとり御所に入っていかれる姿もありました。先生はまた多くの書を残されましたが、群馬県安中妙光院にたてられた先生の手による、新島襄先生祖父と令弟の墓の碑文、そして若王子山頂、同志社共葬墓地にある「この生命は人の光なり」という楷書による碑文は、まことに美しくさわやかであり、その筆勢は力強くあたたかさにあふれています。

住谷先生は、まことに信仰の先達であり、真正なる教育者、研究者であり、地の塩、世の光としてその生命を全うされました。

学校法人同志社は、数えることのできないご貢献とご苦労を思い、住谷悦治先生に対して深甚なる謝意を表します。

天にある先生の御霊の上に永遠の平安を願いますとともに、ご遺族の方がたの上に天来の慰めが豊かにありますよう祈ります。

〈一九八七年十月二十四日追悼礼拝〉（学校法人同志社総長）

〈住谷悦治先生を偲んで〉

希望を語りつづけられた先生

辻村一郎

私が住谷悦治先生にはじめてお目にかかったのは一九五五年四月のことで、当時、先生担当の「経済学説思想史」の開講のときであった。明徳館の大教室の教壇にたたれるなり、黒板にルイ・アラゴンの「大学歌」の一節を大書された。

教えるとは、共に希望を語ること
学ぶとは、真実を胸に刻むこと

そして、希望と真実に「のぞみ」、「まこと」とかなをうたれたことを覚えている。この「歌」は、先生が愛誦された実にたくさんの詩や言葉の一つであるが、教えを受けたわれわれには先生の思想と実践そのものとして胸にいきづいている。

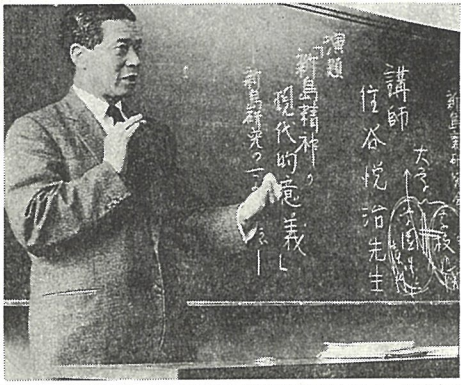
いうまでもなく、先生は社会科学理論として、唯物弁証法あるいは唯物史観の立場にたっておられるが、その考え方が先生の人生観や社会的態度を決めていることは、先生ご自身も言っておられた。同志社アカデミズムの担い手としても数多くのすぐれた業績を残された。先生のそのライフワークの日本経済学史研究は、社会政策学会あるいは社会政策学派を中心になさっているが、これを克服し、批判する対象としての研究の立場は先生の思想体系に照らしてみて社会主義である。

先生は、また、ロマン・ローランの「魅せられたる魂」を愛読され講義の中でも語られた。魅せられた魂とは、自分がやりたいこと、やらなければならないと思うことに「呪縛」されることだ、といっておられた。教室・研究室の内外で、私達学生はたくさんのことを学んだが、経済学、思想史、社会科学から哲学、宗教、歴史、文学、美術、芸術、音楽など、さまざまな分野にわたり語って下さったが、その広く、深く、豊かな学識に圧倒され、魅せられたものだった。

先生の戦後の業績で重要なものに河上肇研究があるが、その河上博士について講義されているときには、必ず河上博士との出合いについても話される。大正一一年東大を出て、吉野作造先生の推薦で同志社に勤めるため京都に来られたとき、やはり吉野先生によって河上肇博士に合われたこと。しかし、それよ

り前、大正八年に河上博士の「彼が二七歳の時」(博士の個人雑誌「社会問題研究」の創刊号に掲載)を読まれ、その真剣な思想的遍歴者としての博士の人生的態度に心の底から動揺され、初めて読んだ日の夜は感動のため眠ることができなかったこと。それからは古本屋漁りをして河上博士の書物を片っぱしから蒐集され、「経済学の根本問題」「日本尊農論」「社会主義評論」「人生の帰趨」「時勢之変」「貧之物語」等々を入手して息もつかざず読破されたこと。それらは社会主義ではないが、人生的感動というものが、先生に社会主義への道を開かしめたこと。このような体験を語られながら河上肇の経済学や思想を紹介されるのであるから、それはもう河上肇についての、たんなる知識、教養ではなく、先生ご自身の多面的な関心と感動そして傾倒、努力そして成長、いわば先生の生き方と結びついているもので、そこに私達は魅せられていたといえる。

研究に公務に実に多忙だった先生だが、われわれ学生に対して、いつも研究室を開かれ、また、サークル、研究会にも気軽に出かけて下さった。どのような学生に対しても分



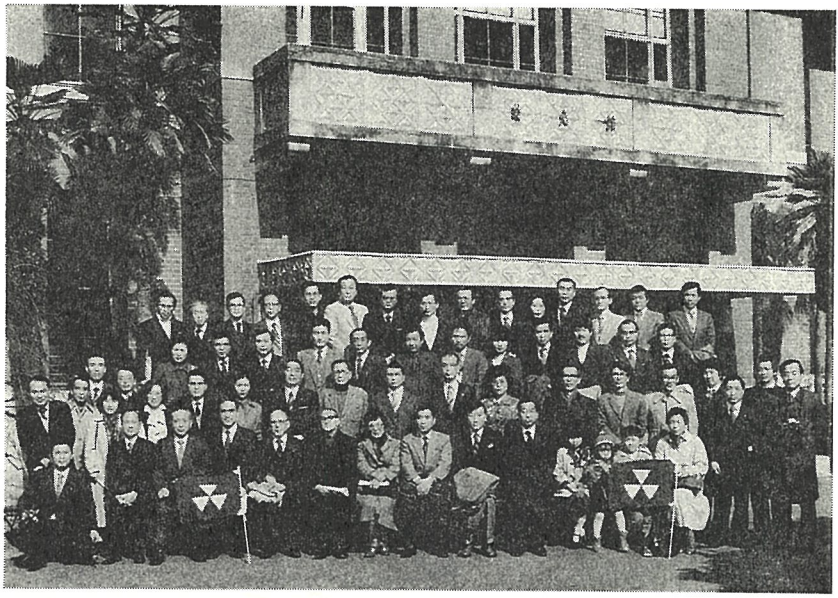
講演中の住谷先生(同志社学生新島襄研究会にて、1957年)

けへだてなく声をかけられ、耳を傾けて下さった。とくに、勉強しようとする学生には貴重な蔵書を先生の方から貸し与えられたが、学生の研究に役立つことなら労をいとわず、惜しげない援助をして下さった。

明徳館四階の北東の角の研究室に入ると、書籍だけでなく絵画や骨董品それに収集された広告のチラシのような類まで無造作に綴じて並べてあった。目当ての本をさがして貸して下さるのだが、必ず、その場で本を開き要点を解説してから手渡して下さった。その本は、欄外にぎっしりと書きこみがしてあり、また、赤や黒で傍点がうってあった。ときには、友人からの絵ハガキなどがはさんであったが、私達は書きこみや傍点のか所から、本の読み方ノートの仕方を学んだように思っている。

私達のゼミナールではルカーチの「階級意識論」(未来社の社会科学ゼミナール)をテキストに使用された。難解であった。しかし、毎回の先生のかみぐだいた解説、それに一度ではあったが、この書の訳者、京都大学・平井俊彦教授をゼミにお連れ下さっての授業などで、学生は、理解したような気になって、途中からは予習も熱心にするようになったものだった。

この私達ゼミ生が卒業を間近にした最後のコンパの折り、卒業後も連絡をとりあって親交をあたためていこう、また、先輩・後輩にも呼びかけようということで会をつくることにした。ついては会の呼称をどのようなものにしようかということになった。誰れいうとなく、先生は議義やゼミで、弁証法的発展の「アウフヘーベン」あるいは「止揚」という



住谷先生をお迎えした最後の紫葉会（昭和56年２月８日(日)）

言葉をよく使われること、また、住谷ゼミが今後もますます発展するように、というねがいから、「しよう」という言葉を使うということになった。そのとき一人のユーモリストが紫葉会はどうかというで、先生も含め全員一致で決まった。紫はいうまでもなく同志社のカレッジカラーであり葉はクローバを表わしている。一九五〇年から始まって、先生がゼミを担当されなくなる一九六四年まで（途中二年間休み）約四四〇名の紫葉会会員がいる。一九八一年二月に紫葉会総会を開いたが、このときが先生ご出席の最後の総会になった。昨年十月二四日、同志社主催の追悼礼拝のあと同志社女子大の坂本武人教授の研究室に会員三〇名が集り、一人一人先生を偲んだ。それはお互に知らないエピソードであり、住谷先生像であった。先生はおられないが、紫葉会は存続させ、先生を偲びつづけようということになった。

先生が権力と官僚を嫌われ、同志社を愛し、建学の精神、とくに新島先生の基本的人権尊重の精神を受けつぎ、「学園に真の自由と平等とを実現しましょう」と訴えられたこと、同時に平和と民主主義を啓蒙され、立命館大学総長であった末川博教授とともに平和運動、民主主義運動の支柱となって社会的に幅広く活躍されたこともよく知られている。学内においては、一九六〇年代初めから総長時代も、同志社平和の会(日本平和委員会加盟)の会長をしていただいた。教職員、学生の平和・原水爆禁止運動はいうまでもなく、婦人、母親運動をはじめあらゆる民主主義運動に限りない励ましをいただいたし、今なお、励まされている。

（大学文学部教授）

〈住谷悦治先生を偲んで〉

人間・住谷悦治

西村豁通

人々との出会いや別れはむしろ劇的であってよい。住谷先生との場合はことにそうである。一九五二年、いわゆる「教授招聘運動」の難航のなかで非常勤講師として迎えられ、その一年後の住谷学部長の時、正式に移籍を要請されたという邂逅により、住谷教授の人となりを知り得る機会に恵まれた筆者であった。したがってこの教授の多彩な人間的側面を描いてみたいとする衝動は常に潜在していたし、人の世の袂別に当りその全体像に迫りたいというのも自然の想いである。しかも近年、その人の生前の姿とはかけはなれた美辞麗句を連ねる弔辞や追悼文に接し、耐えがたい白けを覚えることが多く、こうした儀礼的な「誄墓の辞」を以て「事を定」めるには、住谷先生はあまりに人間的であった。そしてこのことは自らの葬儀のとりやめをまで願った先生の死にざまにも似あわず、また全面追従はかえってその豊かな文人的数寄性を一面化することにもなりかねないと思われる。

幸い、筆者がかって一九六三年の十一月、『エコノミスト』誌の強い求めに応じ、住谷先生を「評定」した一文（第41巻・第44号）がある。匿名で赤裸々に先生を解剖してほしいとだけの註文がついた。これは異例の総長選のなかで、学内が物情騒然としていた時のものであったため、その内容とともに執筆者が興味と詮索の対象となった。この文体と筆致よりして、西村の手になるのではとの憶測が流れ、住谷先生からも直接、婉曲なお尋ねがあった。勿論、筆者は口を閉していた。しかしその叙述自体は概して公正で客観的との評価を受けたし、それ故に、かえってこれが理事会承認の決め手になったとの風説も聞いた。いまはその覆面を脱ぐことが先生への最善の追悼であり、現在もこれにほとんどつけ加えるべきことはない。歴史的な文書でもあり、明らかな誤記の一点を除き、若干の文言上の補正を付するに止め、あえてほぼ旧稿のまま次に再録し、惜別の辞とする。

〈この人を評定する—住谷悦治〉

十月十八日、慶応・早稲田とならぶ名門私学、同志社の第十四代総長候補としての当選がきまった夜、住谷の表情はかたかった。「私が総長になるということなど考えもしなかった」、「私は総長になりたいとも思わないし、またなれるはずもない」。住谷は新総長への抱負を聞かれたのに対し、一切ノー・コメン

トで答えなかった。この総長選挙にあたり同志社教職員組合は従来の慣例を破って公然と住谷を推した。このため学園内外の有力筋からこの選挙に疑義をさしはさむ声が流れ、理事会過半数の承認が危ぶまれるかもしれないと伝えられた時点だけに、それは住谷の率直の感慨でもあり、発言は慎重であった。

そして事実、この数日前、学内教職員による被選挙人の推薦候補のなかに住谷の名があらわれ、その後開かれた教職員組合の緊急執行委員会において、突如彼が組合推薦の総長候補として浮かび上ってくるまで、おそらく住谷自身は自分が総長候補にあげられることを夢想だにしなかったにちがいない。現在六十七歳。もはや教授としての定年をすぎ、大学院教授としての退職をあと二年数カ月後にひかえた住谷であってみれば、彼に残された教授としての最後の日々をしっかりと、しずかにかみしめながら送っていたのであろう。時としてゲーテのように晩年の激情に身をゆだね、遠い過去の苦難と活動の日を想うことはあっても、執筆以外ほとんど学内外の役職には無縁の近年ではあった。

「私は役職につくのをあまり好まない」。よくこう人に語る住谷であったが、彼の表現とは反して、戦後の住谷はしばしば社会的活動の場にかつがれて登場した。京都新聞論説部長、夕刊京都の二代目社長、そして京都労働学校の初代校長……。書や洋画をよくし、京都のいわゆる下鴨文化人たちとの清交のなかに、戦後やっと彼に訪れた平安を楽しんでいるかにみえた住谷。だが、戦前、治安維持法違反、教職追放という〝輝かしい前歴〟をもつ住谷は、その過去の栄光の故にも激しい京都の文化運動の渦中から逃れることができなかった。

しかも東大在学中、大正デモクラシーの闘将、吉野作造に師事し、阪本勝、河野密、風早八十二らとともに東大ＹＭＣＡや新人会で活躍した住谷にとって、文化運動を通じての社会的実践が全く興味のない存在である筈はなかった。概して率直で自己表現的に人々との交際を楽しもうとする住谷。こんな住谷の半面からは彼がその文化的社会活動を支える十分な資質を有しているかにみえる。だが他方、純情で善意の彼は、しばしば政治性の足りなさを指摘されることがある。役職につきたくないとする彼の表明は、おそらく〝サロン・キルキスト〟を自称する彼にとって自らの限界を知っての、いつわらざる発言とうけとってよいであろう。

東大新人会時代、いちはやくマルクス主義に接近し、そのあやしげな魅力にとりつかれて人道主義的立場よりマルクス主義へ移行した住谷は、その当時においても労働運動や社会運動の直接的実践に身を投じたのではない。昭和八年に検挙され、下鴨署での拷問、ついで同志社やその後やっと職を得ることができた松山高商からの追放。彼にとっての一連の受難の歴史も、それは彼がマルクス主義者であることに起因していたが、その発端となった直接の契機は、知人の紹介でたずねてきた見知らぬ一青年に旅費五十円を与えたことにすぎなかった。

人のよい住谷は自らを知りながらも、結局人々の求めに応じて運動の表面におし上げられ、そして時代の激流におし流された。企業の経営者としては労使のきびしい対立に悩まされ、京都労働界の興望を担っての労働学校の校長は、そのスポンサーとなった京都市と高山市長をめぐる選挙運動の渦中で泥にまみれざるを得なかった。それは住谷の政治力の

不足というよりは、彼の人を疑わず、気安く他人の依頼に応ずるという善意そのものに問題があるのかもしれない。浅く広くというのであろうか。深い交りを求めようとする人はその温かさにひかれながらも、その落着かぬ応対と感覚的な発想に一抹のもの足りなさをどうすることもできないという。

中学時代、海と異郷へのあこがれに船乗りを志したこともあると話す住谷。いまだ精神的にも肉体的にも若々しく、その情熱と活動力に不安を抱くことはないとしても、きびしい対立のなかに生き、一党一派に偏するには、住谷はあまりにも夢が多すぎるのでもあろう。請われれば共産党代議士の応援演説にも立ち、一方、保守市長の推薦をも辞さない住谷。彼の変革的思想に期待をよせる人々は多かったが、そのマルクス主義者というよりは典型的自由主義者としての八方美人性に幻滅を感じて去った人も少なくない。しばらく俗事をはなれて読書にひたっていたいわば耽美派の教養人に予期せずころがり込んだ総長の座。同志社総長は目下象徴的存在とはいえ、この任は決して安易なものではなさそうである。

いま住谷の周辺には二つの潮流がうずまいている。一つは今回の総長選挙にあたり住谷の推薦と選挙運動を敢行し、彼を先頭に同志社学園民主化の体制を固めようとする勢力。他の一つは住谷の当選に当惑し、旧い同志社の体制をとりつくろい、維持するのに腐心している人々。民主的学園を誇る同志社であればこそ、住谷の当選は微妙な波紋をなげかけている。推薦候補への第一次投票で住谷が第一位にたった時、候補辞退の勧告が住谷にむかって電話されたといわれる。

旧い学園の体制が組合の攻勢の前に崩れさるという心配もさることながら、組合の異例の選挙運動に対する明らかな反感。住谷の人柄からくる学内諸問題の処理能力に関する不安。住谷が理事会内の少数派勢力の紐つきになるのではないかとする懸念。おもわくはさまざまながらいわゆる革新総長誕生への反応は多様である。だが同志社学園の革新側も手ばなしで住谷の登場に拍手をおくっているのではない。彼の底ぬけの人の好さに、その妥協的性格、住谷の性情が一本気で激しやすいとすれば、そのスタンド・プレーと統率力の欠如が、不測の事態を招かねばよいがと危惧する向きもないではない。

新島襄の創立になりキリスト教主義をもってたつ同志社学園がマルクス主義者の住谷を迎えての困惑の色はおおえない。しかも同志社がキリスト教の受洗者のみに総長の被選挙権を与えている限り、かって旧制二高合格時、郷里の利根川で洗礼を受けた住谷は立派な有資格。さらに住谷は群馬県の産。新島襄、海老名弾正といった同志社を代表する歴史的人物を同郷人とする住谷は、また新島と親交のあった叔父住谷天来をもつ、れっきとした同志社外様貴族の一人でもある。

住谷が総長に選ばれた時、同志社旧貴族の崩壊がささやかれ、同志社のバチカンに新風の流れ込むことが望まれた。そして住谷が同志社出身者以外の二人目の総長としてこの役割を担い得ることはその開放的な人柄からして不可能ではあるまい。その学問的領域も広く、文化的教養のゆたかな住谷。しかし彼の経綸がそれだけにサロン的書斎談義におわるならば、新総長としての住谷が多くの困難をかかえた私学の教学に解決のメスを入れるには、なお多くの問題が横たわっているといえよう。

（大学経済学部教授）

住谷先生を偲ぶ

大江直吉

住谷先生を偲ぶ追悼文の依頼を受けて、少々戸惑ったのですが、私の人生には住谷先生との出会が三回もあります。

先ず最初は私が同志社大学の政治学科に入学をした昭和三年四月のことであります、その時に独書講読を受け持って頂いたのが住谷先生であります。

現在の明徳館の建っている場所に、木造建ての予科の合併教室がありました。その教室に法学部の先生が四・五名来られて、諸君が来年度学部に進学する場合には、是非共「政治学科」に来るようにとの勧誘のスピーチがありました、今迄は「政治学科」を志望する学生が非常に少なくて、二・三名から多くても五・六名位であったようです。

四月の新学期になり「政治学科」の授業を受けに登校すると、十五名という学生が集ったわけです、近年にない多数の学生ということで、学校側は大いに力を注ぐことになったようでありました。

住谷先生からは、先にも述べましたように独書講読を受けたのですが、先生は、その時に「各国の無産政党の綱領を勉強することに仕様と話されて、マルクスの「共産党宣言」という本をテキストとしたいと申されました。この本は手許にはないので、書店から取り寄せて貰うことにして、書物が到着するまでは、学校の方で「プリント」を用意するから」と。それによって勉強をすることになったのであります。

「アインゲスペンスト、ゲートウム、ユーロップ、ダスゲスペンスト、デスコンムニスムス」という言葉から始まる共産党宣言は私共にとってはまことに魅力的な本でした。此の独書講読を通して、若き住谷先生は様々なことを、熱っぽく教えて下さったと思っております、当時の先生は三十歳を少し超えられた頃で、ブハーリンの「唯物史観」を勉強して居られた時期ではなかったかと思います。

この頃のことを今から、ふり返って見ますとまことに楽しい青春の一時期であったと言えます。私共は昭和六年に卒業したのですが、不況の時期でもありました。私自身も失業の身を故郷で二ヵ年余過す破目になりました。昭和六年には満州事変が起り、日本が次

第に戦争の方向に進み始めた時期でもあったわけであります。

先生も二年後の昭和八年八月には、同志社の教授を退職されることになったことを、故郷で、新聞を通じて知りましたが、どう仕様もありませんでした。

第二回目は、終戦後の二十二年の春であります。私は昭和十七年より東京で働いて居りましたが、戦争が激しくなり、家族を故郷に疎開をさせ、終戦時にも東京に一人残っておりました。二十年の暮れに、もう一度東京に戻る予定で、一先ず田舎に帰って参りましたが、故郷は東京以上に食糧難で、生きる為めに食糧生産に努めなければならず、止むを得ず山村での生活を続けざるを得なかった次第でした。

その頃、村の有志の人々と相計って、小学校で「文化講演会」を開くことにしました。今後どのように生きればよいのか、亦日本はどういう方向に行くのだろうか？　という事をテーマにして、その講師の交渉を私が受け持つことになり、講師として住谷先生に私の山村に来て頂くことになったのです。これが第二回目の出会いでありました。

当時、住谷先生は四国の松山高等商業学校を退職されて、京都で「夕刊京都新聞社」の社長をして居られる時期でありました。二十年の春と秋と二回、田舎に来て頂きました、住谷先生だけでなく能勢克男先生も一緒でした。他にもう、二名の講師をお願いをしたと思っております。

講演会は盛会で、若い人は勿論、村の人々が多数集って、熱心に話を聴いて下さいましたので、私共はよいことをしたと喜び、講師の方々にも感謝をした次第でした。

住谷先生の話は、新らしい憲法が制定された時期でもありましたので、民主主義の精神とは何か、一言で申せば「主権が皆さん一人一人にある、即ち「主権在民」ということであります、今迄の明治憲法は「大日本帝国は万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とありますように、今回の憲法のような「主権在民」の憲法ではなかったのです。天皇の力がとても強く、「議会も内閣」もこれに従属するものでした」と言った様な話を中心に、日本に於けるデモクラシーの発達を極めて平易に要領よく話して頂いた様に思っております。

その後、私も偶然なことから同志社に働かせて貰うことになり、しばらくすると先生も再び同志社に復帰されることになりました。その後、更に総長として本部の総長室に入られることになりました。私も亦、生島君の後任として、大学から本部に転任することになり、此処で同じ有終館のフロアで、先生の許で働くことになったのであります。これが第三回目の出会いということになります。

同志社の総長は入学式には新入生に「お祝いの言葉」を、卒業式には「餞(はなむけ)の言葉」を送られますが、歴代の何れの総長も、まことに感銘の深い立派なスピーチが数々ありました。

住谷総長のスピーチも私には、今でも忘れることが出来ません。入学式のスピーチに「私は入学された学生諸君に申し上げて、是非とも実行して頂きたい事があります。それは一ヵ月に一冊必ず良書を読んで頂くことであります、とも角一ヵ月に一冊の書物を読む習慣を身に付けることです、一ヵ年経てば十二冊となり、四年後の卒業する時には少なくとも、諸君の本棚には四十八冊の書物が並んでいることになります。本日は御父兄の方々も多数御出席下さっていますが、自分の息

子、娘が本学を卒業する際に、その本棚に最低、四十八冊の良書が並んでいるか、どうかを、是非共確めて頂きたいと思います……」

また先生が総長になられて、しばらくしてからの卒業式の「餞(はなむ)けの言葉」に、その頃は卒業式が次第に派手になり、卒業式には振り袖姿の女子学生が多くなる頃でもありました。ある女子学生が、先生に、自分は立派な衣装を着て卒業式に臨むわけにはいかない旨を訴えたようであります。先生は、その年の卒業式のスピーチに「最近の大学の卒業式は次第に華美に流れ過ぎていはしないか、質素で、小奇麗な洗濯された普段着で十分であって、卒業式のために高価な衣服を新調する必要は更々ない様に思う……」と話されました。翌朝の新聞に同志社総長の式辞として、此の主旨が掲載されました、すると、早速、先生の宅に西陣の織物業者の方々から、「華美な服装は不必要と言ってもらってはまことに困る……」という苦情の電話があったと、苦笑しながら、後日話されたことがありました。これも私にとっては印象の深い先生のスピーチの一つでありました。

住谷先生は、何でも人から依頼されると、断ることが出来ない人でした。時間が許す限りその申し出でを受け入れられました。そうした先生の性格を知ってか、ことある毎に、先生に様々な講演や寄稿の申出でが多かったようです。先生はその申入れを拒まず、出来る限り心よく承諾されました。自分を燃焼させて、人々に尽されたのでありましょう。

自分の持てるものを人に与えて、少しも惜しむことを知らない人であったと思います。先生の著作目録を過日拝見して、その数の多いのに、只驚くばかりでありました。

立派な人とは、自分の持てるものを、借し気もなく、自分の周囲に振りまいて、求めることなく、涼しい顔の出来る人のことを言うのでありましょう。

住谷先生も、そういうことの出来る一人であったと、私には思えるのであります。

（瓜生山学園理事）

同志社談叢 第七号

論文

新島襄の「私学」思想……沖田行司
福士成豊と新島襄……関　秀志
—福士の新島宛書簡を中心として—
スカッダー家の人びと……本井康博
—L・Lジーンズと熊本バンドをめぐって—
水沢における山崎為徳資料……高橋光夫
—水沢教会収蔵資料を中心に—
雲峰論補遺……河野仁昭
同志社の近代建築（補遺）……前　久夫
—遺構と資料—

資料

聖霊降臨記実　後編
同志社理事会議事録
大正八年十一月～同十一年八月

（頒価一、〇〇〇円）
発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話（〇七五—二五一—三〇三七～八）

〈住谷悦治先生を偲んで〉

父を語る

——子の見た父の肖像（ポートレート）——

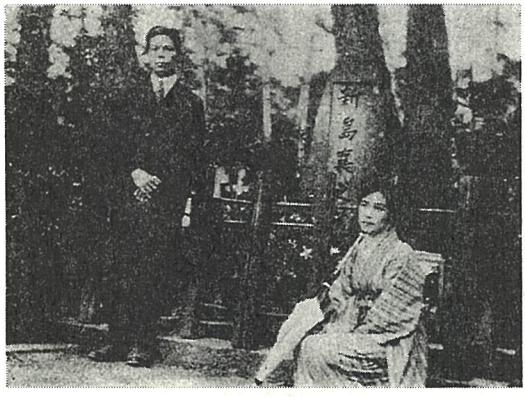
住谷一彦

一　家系

父は群馬県群馬郡国分村（現群馬町）字東国分、住谷友太となんの次男として、明治二八年一二月一八日に生を享けた。八人兄弟であったが、長女ひで子、長男亮一は早くして逝き、幼少の時代に骨肉の別れを経験したことが、生と死に対する父の感情を非常にセンシブルなものにした。『すばらしい老年期』（住谷悦治・磐共著）の一文は、六十五年の歳月を経てなお生々しく残っている兄の死への思い出を語っている。「とくに最愛の兄の脳膜炎に苦しむ姿、火葬のなかったころのわたくしの中学時代に、その苦しんで死んだ兄の死骸を、村の三人の役目の人たちが大きなかめの中に死んだばかりの兄の死骸を押し込む残酷な仕方……のぞき見たわたくしは胸のつぶれる思いだった。兄さん……と泣き叫んだ」。父が晩年太田典礼氏の「日本老人福祉協会」の顧問になり、安楽死の立法化に賛同したのも、兄姉の死に起因するところ大であった。そして、早くから事実上の長男としての役割を強いられたことが、父の家系への関心

前橋中学入学当時

前橋中学4年生の頃



大正11年、結婚当初、若王子同志社墓地にて

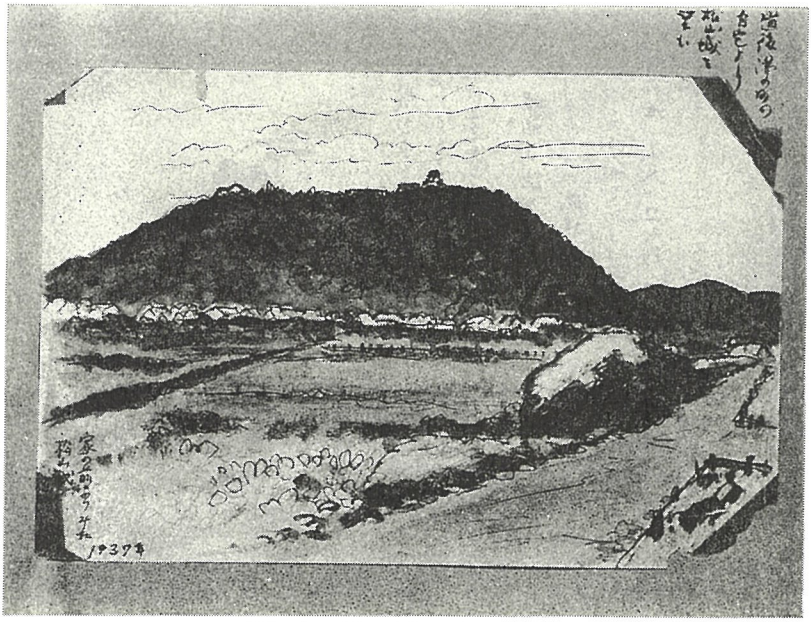
をいっそう深めさせるに至ったように思われる。後年父は群馬の家に残っている系図を丹念に調べ、伝承の古文を探査し、私たちの世代までの「住谷家系図」を作成した。それによると、住谷家の始祖は宝徳二年（一四五〇）伊賀から越後に移り関東管領であった北条家に仕え、亡びてのちは帰農した角谷源清友家であったという。始祖からの七代は伝承されたにとどまるが、系図に残る初代は角谷治郎右衛門であり、父の曾祖父弥次兵衛のとき分家し、父はその第一五代ということになる。この系図を作ったとき、父は私に住谷家には江戸時代にすでに優れた歌人、芸術家が出ており、その血が叔父天来のすばらしい漢詩の才に現われ、さらに弟三郎の短歌、盤根の絵画、完爾の画才にも出ている所以を嬉しそうに話してくれた。今にして思えば、父が若き日に啄木ばりの歌を作り、晩年まで彩筆に心を奪われていたのも、そうした血をひいていたからであろう。

二　父の思想的系譜

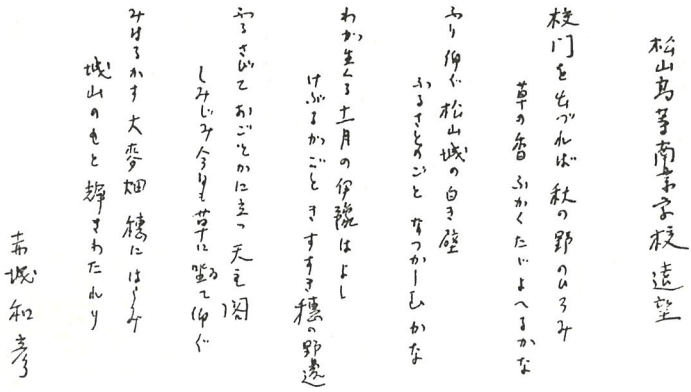
私たちが物心のついた頃の思い出は、そのほとんどに警察、右翼、憲兵といった国家権力の黒い影がちらついている。それが我が家の楽しかった一家団欒のときをしばしば容赦なく中断する。世の普通の家庭と異なるこうした事態がどうして我が家に生じたのか。それにはやはり父の人生を方向づけた思想について述べなければならないであろう。

父がくりかえし至るところで語り、また書いている人生の師は、叔父住谷天来であった。天来は慶応義塾に学び実業家を志したが、キリスト教を知って改心し、高崎教会牧師として自らの生を福音の伝道に捧げ尽した非戦平和の使徒であった。若くして群馬の廃娼運動に身を投じ、内村鑑三とは生涯の盟友であり、木下尚江とも親交があった。父はそうした叔父に私淑し、叔父もまた父を愛し、我が家には叔父の「愛甥に贈る」雄渾の漢詩が多くある。父は前橋中学時代に叔父の手で全身を利根川の水に没して洗礼を受けた。父の一生をふちどっている非戦平和の牢固たる姿勢は、のちにマルクス主義によって一層強固にされたとはいえ、その核に叔父天来の志魂がやどっていることは、何人の眼にも瞭らかなところである。

昭和12年、松山高商就任の頃



昭和12年、道後の自宅より松山城を望む



赤城和彦のペンネームによる自作の歌

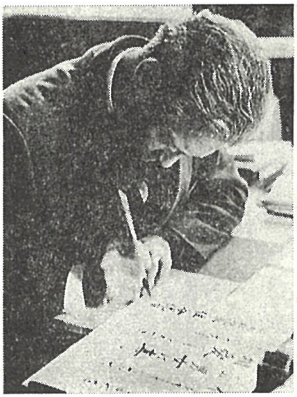
知識は読書によって豊かさを増していくが、生きた思想は人との出会いを通して受容される。その意味では父は恵まれていた。仙台の第二高等学校時代に、土井晩翠、登張竹風、粟野健次郎の三先生によって読書の楽しみを知ったことは、人生いかに生くべきかに思いをめぐらすうえに大変巨きいものがあったといえよう。高山樗牛、夏目漱石、ゾラ、ドストエフスキー、トルストイ、ツルゲーネフ等猛烈に乱読し、自ら「私は文学読書青年」であったと、後年述懐しているほどである。そのかたわら明善寮から仙台の教会日曜学校

自画像、昭和10年当時の失業中

に教師として通っていた。弁論部員として熱弁をふるい、旧制高校における多感なる青春を大いに満喫した時代である。

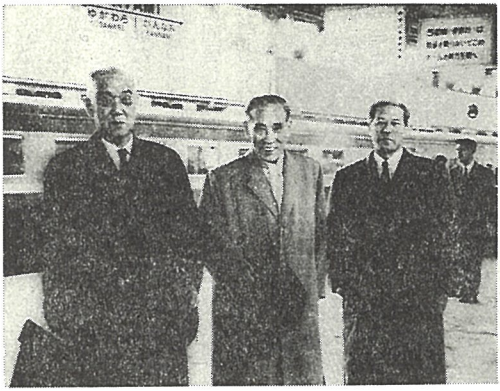
学問、思想にはじめて眼を開かれたのは、東大法学部の学生になってからであった。生涯書きつづけた日記をみても、高校時代のロマン主義的雰囲気は決して消え去りはしなかったものの、資本主義社会への、不平等な生活の現実への関心がこの頃から前面に押し出されてくる。父の一生を方向づける社会思想への最初の洗礼は、刑法の牧野英一、政治史の吉野作造先生から受けた。とくに吉野作造は父が学生生活を送った本郷追分の東大学生基督教青年会の理事長であり、二高の大先輩、また保証人でもあっただけに、公私にわたってその影響力は決定的であり、大正五年一月の『中央公論』に載った吉野の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」という民本主義（デモクラシー）の論文は、つねに父の座右にあった。父が中学時代から尊敬していた海老名弾正先生は本郷弓町教会の牧師として大正デモクラシーの思想的潮流に棹された説教で青年子女の心を魅了し、会誌『新人』は、時代をリードする役割を果たしていた。父もこれにしばしば社会の新理想について熱っぽい寄稿を行なっている。当時の青年会寄宿舎にはの

アーモスト館にて卒業生の結婚式出席、住谷夫妻、昭和四十二年頃



総長室にて昭和42年頃

ちに労働運動、政党活動を指導した河野密、風早八十二、松沢兼人といった有為の青年が集まっており、また宮本鉄之助、堀豊彦といった学者として優れた資質に恵まれた青年が寄宿していた。日本最初のメーデーに河野密とともにわざわざ労働者のナッパ服を着て参加した話は、私たちも父からよく聞かされたものである。新人会に加わって活躍したこともふくめて、父はその全身に大正デモクラシーの空気をいっぱいに吸って成長していったのであった。



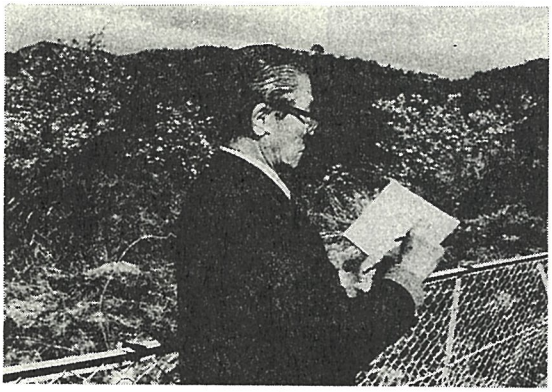
左より広津和郎、荒畑寒村、住谷（総長就任の頃）

しかし、父の社会思想に決定的な影響を与えたのは、マルクス主義であった。とくに河上肇の個人雑誌『社会問題研究』は、刊行のたびに熟読含味し、「彼れが二十七歳の時」という一文は感動のあまり夜も眠れなかったという。のちに同志社に赴任を決意するに至った動機の主な一つも、京都に河上先生がいたからであった。理論面における父の恩師が河上肇および櫛田民蔵氏であったとすれば、実践面における師は、学生時代から面識のあった堺利彦、山川均ならびに無政府主義者の石川三四郎氏であった。こうして自由主義的な理想主義者であった父は、次第に実践的な社会主義者へと脱皮していったのである。時代は大正も終りに近づき、恩師吉野先生の勧めで同志社に決まった頃、関東大震災、米騒動と、昭和の動乱の秋が水平線上に予感されはじめていた。当時の父の日記は、「主義者」として生きることへの不安と苦悩で満たされている。それは戦前の軍国主義的な陰鬱な雰囲気を知らぬ者には到底理解し難いものであった。

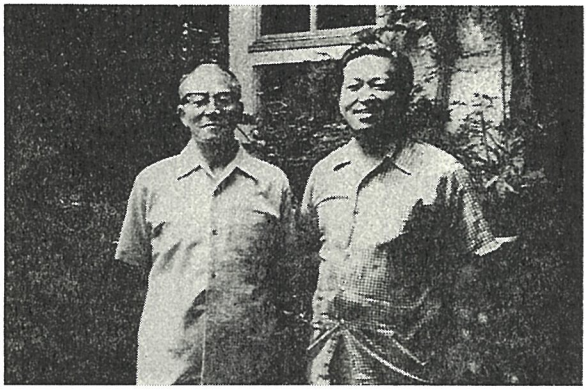
群馬県高崎にて、新島襄碑完成の頃

三　父の肖像

父は大正一一年五月五日、五歳年上の母よし江と相思相愛のうえ、友人の下宿で叔父天来の祝福を受けつつ友人数人が列席して式を挙げた。およそ世の常なる華やかな結婚式とは無縁なささやかな挙式であったが、かえって注目され新聞にも報じられた。大学教授のポストは確かに恵まれたものではあったが、病弱の母と幼ない子二人を抱えて「主義者」として生きる前途は多難であった。昭和八年の瀧川事件では新聞に支援の筆をふるって当局に睨まれ、ある日訪れた一青年に旅費を与えたことで共産党シンパとして検挙され、その時うけた膝に石板七枚を積む拷問は、晩年に至っても寒くなると痛みを覚えるほど苛酷なものがあった。情勢は厳しく同志社を辞した父は、恒藤恭、菊池寛氏の好意で『文芸春秋』社特派員として難を欧州に避けることを余儀なくさせられた。一年にわたる亡命(?)生活の間、私たちは母の妹一家と神戸市六甲に同居して父の帰国を待った。友人堀豊彦氏の尽力で台北帝大に職が決まって帰国したら、台湾総督府の命で取り消され、私たちは路頭に迷うことになった。さいわい同じく学友であった田中忠夫氏の好意で松山高商に就職できたとき、私たち一家は、やっと世の普通の家庭の幸福を見出だすことができたのであった。松山時代は楽しかった。高商の学生は我が家に入り浸って父母と人生論、映画



昭和54年の頃



昭和50年当時、長男一彦と共に

論、芸術、さらに学問論を闘わしていた。やっと平穏な薄日がさしかけた我が家にとって、歴史の歩みは非情だった。日本の政府と軍部は満州から中国にと帝国主義的侵略を拡げ太平洋戦争に突入した。前年出版した『近世社会史』が発禁となったのをきっかけに右翼による父の排斥運動が高まり善通寺師団長の介入もあって、父は遂に高商を退職、私たち一家はふたたび失業の生活に入った。父の一番苦しかった時である。父は再就職に狂奔し、親戚、友人宅を転々としたが、定まらず、匿名の原稿書き、他人の本の代筆等、全く筆一本で生活を支えた。思えば父の辛苦たるや大変なものであったといえる。この間に父は自らの父および叔父天来を失なっている。子供二人も軍隊にとられ、京都の寓居に父母はひたすらひっそり過ごすほかはなかった。昭和二〇年の春、旅順にいた私のところにとどく父の便りには、戦いが終りに近づいていること、生命を大切にすることがつねに書かれており、私は便りのとどくたびに非国民的な父を持ったかどでなぐられた。だが、それこそは父の変らぬ真情であり、この核があったればこそ、敗戦を迎えたとき、父はあたかも堰を破った奔流のごとく、平和と民主主義の新生日本の夜明けに向って恒藤恭・滝川幸辰・末川博各先生らとともに日夜めざましい啓蒙活動に邁進できたのではなかろうか。それは子である私たちからみても眼を見張るものがあった。夕刊京都社長時代、マッカーサー指令による同志社復帰、そのあとの同志社大教授、さらに総長時代の生活については、その頃からずっと東京の生活を続けている私よりは、弟磐の方が身近にいてはるかに良く知っているはずであり、彼にあとはゆずることにしたい。

おわりに一言。山脈（やまなみ）の美観は近くでは分り難いように、人の全貌も身近かすぎると捉え難くなる。子の知る親の姿も同じであろう。私も父の死後に友人、知人の方々の語るところ、記すところから初めて知ったことが多い。そのうえでのことであるが、父は私が研究者の生活に入ったとき、佐藤一斎の「学習不倦」を書いてくれた。その額を日夜見上げながら、父が最晩年まで朝のラジオでの英会話を欠かさず聴いていた姿を想い浮べるのである。父の一生もまた、この額の通りだったと思いつつ。

（立教大学経済学部教授）

同志社談叢 第八号

論　文

新島襄とホランド……北垣宗治
「新島襄の函館脱出時の写真」について……桑嶋洋一
大正期の柏木義円……武　邦保
—その信仰と社会思想の底流を求めて—
明治中期における岩手県の基督者群像……高橋光夫
—相沢扁次牧師資料を中心として—

資　料

同志会社議録　明治二十四年一月～同二十九年九月
『同志社談叢』既刊総目録
同志社社員会・理事会等記録翻刻一覧
新島襄に関する文献ノート（その六）……河野仁昭

（頒価一、〇〇〇円）
発　行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話（〇七五—二二五一—三〇三七～八）

故住谷悦治略歴

1895（明治28）年12月18日　群馬県群馬郡群馬町大字東国分545番地に住谷友太・軟の次男として生まれる
1914（大正３）年３月　群馬県立前橋中学校卒業
1918（大正７）年７月　第二高等学校一部甲類（英法科）卒業
1922（大正11）年３月　東京帝国大学法学部政治学科卒業
1922（大正11）年４月～1933（昭和８）年８月　同志社大学法学部助手、教授
1934（昭和９）年４月～1935（昭和10）年３月　東京文芸春秋社欧州特派員として社会政策施設研究のため渡欧
1937（昭和12）年４月～1942（昭和17）年７月　松山高等商業学校教授
1945（昭和20）年10月～1946（昭和21）年10月　京都新聞社論説部長
1946（昭和21）年４月～1947（昭和22）年４月　同志社大学客員教授
1946（昭和21）年４月～1947（昭和22）年４月　愛知大学教授
1946（昭和21）年12月～1947（昭和22）年10月　夕刊京都新聞社社長
1947（昭和22）年12月～1948（昭和23）年12月　地方労働委員会第１回公益委員
1949（昭和24）年４月～1949（昭和24）年７月　同志社大学経済学部講師
1949（昭和24）年４月～1962（昭和37）年７月　松山商科大学非常勤講師（年１回集中講義）
1949（昭和24）年７月～1965（昭和40）年12月　同志社大学経済学部教授
1950（昭和25）年２月　同志社大学より経済学博士の学位を受く
1950（昭和25）年４月～1965（昭和40）年12月　同志社大学大学院経済学研究科教授
1952（昭和27）年12月～1953（昭和28）年３月　同志社大学研究所長（兼任）
1952（昭和27）年12月～1954（昭和29）年12月　九州大学経済学部非常勤講師（年１回集中講義）
1953（昭和28）年４月～1955（昭和30）年３月　同志社大学経済学部長
1953（昭和28）年２月～1956（昭和31）年２月　日本学術会議会員（第三部）任期３年
1954（昭和29）年10月～1962（昭和37）年12月　和歌山大学経済学部非常勤講師（年１回集中講義）
1954（昭和29）年12月～1955（昭和30）年３月　京都市青少年問題協議会委員
1956（昭和31）年10月～1956（昭和31）年12月　アメリカへ視察
1957（昭和32）年６月～1963（昭和38）年５月　学校法人同志社評議員
1957（昭和32）年６月～1960（昭和35）年５月　学校法人同志社評議員会議長
1957（昭和32）年６月～1963（昭和38）年12月　京都市社会教育委員
1957（昭和32）年６月～1959（昭和34）年５月　京都市社会教育委員会議長
1960（昭和35）年８月　モスクワ「国際東洋学者会議」に出席研究発表
1960（昭和35）年９月～1960（昭和35）年12月　ローマ市プロディオ大学にて日本経済学史講義
1963（昭和38）年11月～1975（昭和50）年11月　第14代同志社総長
1964（昭和39）年６月～1964（昭和39）年７月　中華人民共和国科学院の招待により訪中（日中経済学交流会代表）
1965（昭和40）年12月31日　同志社大学定年退職
1966（昭和41）年４月１日　同志社大学名誉教授の称号を受く
1985（昭和60）年６月６日　同志社大学より名誉文化博士を受領
1987（昭和62）年10月４日13時　永眠

〔その他元役職〕　社会政策学会員（幹事、名誉会員）、社会福祉法人京都ライトハウス理事長、社会福祉法人白川学園理事、社団法人京都勤労者学園園長、顧問、朝日新聞社朝日賞推薦者、京都新聞社社会賞選考委員、河上肇記念会世話人代表、同志社山宣会会長、文人連盟参与、学校法人奈良学園奈良文化女子短期大学名誉学長、学校法人マクリン幼稚園監事、京都きもの学院京都本校顧問、社団法人部落問題研究所特別会員、同志社校友会名誉会員